アルカスに住みしモノ、その生存圏

「ラコニアが落ちたと聞いた時は肝を冷やしたぞ」

「そうそう。カイルがおろおろしてた」

「お前は泣いていたがな」

「ないていない」

ラコニアが落ちて一週間と少し。王都アルカスにウィリアム・リウィウスことアルが戻ってきていた。撤退命令が下った後、一度体制を立て直すため、そして再軍備のためにアルらラコニアの兵は各々の居場所に戻る。もちろんすぐにでも戻ることになるだろうが。

「とにかく、ごほん、運が悪かったな。まあお前ならすぐにでも認められるさ」

アルはカイルの言葉ににやりとする。

「運が悪かった？冗談じゃない、キツ過ぎて自分が怖いくらいさ」

「ツイてる？お前は負け戦に巻き込まれたんだろ？」

「ああ、なかなか死闘だったよ。そしてそのおかげで僕を疎んでいたやつも死んだ。かなりの兵数を失って、席が空いたわけだ。まあ大した席じゃないが……空かなきゃ座れないのも事実」

アルは手を広げる。

「負け戦で昇進はない。だけど日々重ねていた糞っみたいは引き分けよりよっぽどいい。なぜか分かるかカイル？ファヴェーラ？」

二人ともあっさり首を振る。考えきもないようで、若干張り合いがない。

「負け戦の後には勝つための戦が組まれるからだ。これは面子の問題。ラコニアの取り合い、その均衡を崩した以上、アルカディアは本気を出して取り返しに行く」

ぽんと手を打つカイル。

「なるほど、必ず勝てる戦が組まれるわけか」

早合点するかカイルに、アルはちっちっちと指を振った」

「はならず勝てるわけじゃない。言ったろ？面子の問題だって。相手も勝ちにいくための戦力を整えているはずだ。ラコニアが奪取された後、こっからが伝統の一戦、アルカディア対オストベルグのラコニア争奪戦ってな」

カイルたち下層民が知る由もないが、ラコニアは一度奪われてからが本番なのだ。歴史上、此処で取ったほうが十年近くラコニアを支配し続ける。とった取られたの繰り返し、七王国同士の面子の張り合い。

「譲れない戦だ。でかい戦になる。負け戦なら全部パー。でも勝てば……でかい功が転がってくる。千載一遇の大チャンスだ」

此処で活躍すれば大きい。負けたとしても大きな戦争、生き延びれば空いた席に座るチャンスは膨らむ。買った時と比べるまでもないが、死ななければチャンスはゼロでない。

「しょっぱい雑魚狩りしててもしょうがない。首だ、でかい首を取る。そして成り上がってやる！」

「まあ戦場のことはよくわからん。ただ、気をつけろよ」

テンションの上がるアルに、カイルが諭す様に声をかける。

「それだけでかい戦だ。僕より強いやつもいるかもしれん。いや、当然のようにいるだろう。そういうやつと戦うな」

「んなこと言っても見分け就かねーよ」

注意されてテンションの下がるアル。カイルは苦笑して、

「そうだな……こういう寒気を感じる相手とは――」

ぞくり。アルの肌が粟立つ。あの時と同じ感覚を――

「戦うな。お前なら見分けぐらいつく。それにいつか勝てるようにもなるだろう。だが、今のお前じゃ勝てない。

合理的でない。理論的でない。しかしアルとて理解している。目の前の男と自身の差は。その男が言っているのだ。心に留めておく必要があるだろう。何よりもアル自身の直感が、勝てないことを確信として持っていた。

「わかったよ。戦わない」

アルはお手上げのポースを取る。カイルはそれを見て微笑んだ。

「ところでアルは何処に止まる？家、ない」

アルのもともと持っていた家は、アルと言う解放奴隷の『焼死』と供に権利を失い。

今頃別の人間が住んでいる。アルもまたそこに戻る気などない。そんなことをすれば、せっかく殺したアルと言う人間が生きていることがバレてしまう。

「泊まる場所がないなら家、貸す。私一人だから気を使う必要もない」

（（いやーそれは気を使うだろ。いろんな意味で））

アルとカイルは心の中でハモった。三人とも親友だがそろそろ大人。男女には色々ある。

「三人泊まれる。広くないけど」

暗に両親が死んだことを表していたが、アルもカイルも底まで気を使わない。ファヴェーラにとって両親は愛すべき存在ではない。また愛されたこともない。一族を堪えさせないためにファヴェーラを育て、ファヴェーラもまたそれ以上求めたことはない。そういうのはすべてこのアルとカイルが満たしてくれるのだ。

「気を使わせて悪いな。ただ一応宛てはある」

がっかりと肩を落とすファヴェーラ。そんなときも表情一つ変えないのは流石である。

「あて？」

「知り合いの家に止めてもらうんだ。断ろうとしても……押し切られた」

知り合いという言葉を聞いた瞬間、カイルはパーッと顔をカカやガセファヴェーラは思いっきり顔を歪ませた。表情を変えないファヴェーラが此処まで変質させるのは珍しい。

「友達か！？」

目をキラキラさせるカイル。その言葉を聞いてあるとファヴェーラが同時につばを「ぺっ！」と吐いた。

「冗談抜かせ。僕にとって友達はお前たちだけだ。あいつは外側。でも外側でも同僚だから断って気を損ねたくないってだけ。無駄に機嫌を損ねて、ラコニアでは失敗していたからな」

ラコニアで自身の上官であった男。最後は盾にして殺してやったが、未だに苛立ちが止まらないあたり、アルもまだまだであった。

「そーかそーか。しっかり泊まってこいよ。仲良くなって来い」

カイルはニコニコと背中を押す。カイルの背をファヴェーラが無言で蹴り飛ばした。

「お、おい。まだ時間に余裕はある！」

「いいからいいから早めにいっとけ、な」

無視するカイル。ファヴェーラは蹴り続ける。

「わーったよ！まあ出かける前にもう一度会おう。それじゃあな！」

そのままアルを押し切ったカイル。ファヴェーラは「はぁはぁ」と息が切れていた。

「遺体じゃないかファヴェーラ」

「カイルが、悪い」

「よいことなんだよ。あいつにとてはな」

カイルは微笑む。その顔に腹が立ったのか、ファヴェーラはもう一度カイルを蹴った。

「いてえ！？顎をけるなあごを！」

「うるさいカイルのあほんだら！」

ファヴェーラはそう言い残してどこかに消える。

残されたカイルはため息をついた。

「依存体質は互い様、か。……俺も人のことは言えんがなあ」

ぽつりとこぼし、カイルはくしゃくしゃと髪を掻き回した。